令和元年度　教育論文

教科・領域　全教科全領域

〈論文題〉

未来を切り拓く
豊かな学びを身につける生徒の育成

～主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくりを中心に据えて～

山都町立矢部中学校　研究同人

はじめに

２１世紀は「知識基盤社会」の時代と言われ，変化が激しく，新しい未知の課題に柔軟に対応することが求められている。その中で学校は，子どもたちに確かな学力，豊かな心，健やかな体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことを重要としてきた。また，今後，１０年の間で，超スマート社会（Society5.0）の到来が構想され，高度情報化，グローバル化や人口減少など社会構造，社会情勢の変化はさらに加速し，子どもたちを取り巻く教育環境も大きく変化することが予想される。現在，各種の調査結果から，思考力・判断力・表現力についての課題や学習意欲，学習習慣・生活習慣についての課題，さらに，自分への自信の欠如や自らの将来への不安，体力の低下といった課題などが指摘されており，来たるべき予測困難な時代に向けて，我々はこれらのことに適切に対応していかねばならない。

そこで，今回の新学習指導要領の移行に伴い，各学校においては「生きる力」をはぐくむため，その大きな要素となる「確かな学力」をどのようにして育成するか，さまざまな工夫と努力が積み重ねられ，研究が進んでいる。本校でも「未来を切り拓いていく『生きる力』を持った生徒の育成」を学校教育目標に掲げ，学を修め向上する生徒，愛を育て共生する生徒，夢を求め錬磨する生徒を，目指す生徒像とし，日々の教育活動を全職員一丸となって行っているところである。

本校では一昨年度「確かな学力を育成する学習活動の工夫～主体的な学び合いを通して～」，昨年度「確かな学力を身に付ける生徒の育成～授業を中心とした学びの連関を通して～」の研究主題のもと，生徒が主体的に学び，自ら課題を解決しようとする態度を身に付けることを目指して研究・実践を行った。その結果，生徒の学習意欲が向上し，家庭学習の状況が改善され，諸学力調査でも一定の成果を上げることができた。その一方で，授業改善の方向性をさらにそろえていくことや，各部会の取組，学級・学年あるいは学校全体の教育活動を研究の方向性とつなげていくことで，さらに子どもたちの「生きる力」を伸ばすことができるのではないかという課題も得た。

よって，これまでの研究の成果と課題を踏まえ，今年度は「未来を切り拓く豊かな学びを身につける生徒の育成～主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくりを中心に据えて～」を研究主題として，授業づくり研究部会，家庭・補充学習研究部会，集団・学級づくり研究部会の３部会を構成し，研究に取り組んだ。ここに１年間の取組をまとめ，自ら総括することにより，今後の研究・実践に生かし，本校研究主題と教育目標の達成に迫りたい。

目　次

はじめに

Ⅰ　研究の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　１　研究主題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　２　研究主題設定の理由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　３　研究主題の捉え方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

Ⅱ　研究の方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
　1　研究の仮説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
　2　研究の視点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
　3　研究組織　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
　4　研究の構想・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

Ⅲ　研究の実際・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
　１　授業づくり研究部会の取組（視点１について）・・・・・・・・ ・・・ 6
　（１）主体的・対話的で深い学びの授業スタイルの提案・・・・・・・・・ 6
　（２）全ての教師の指導力向上につながる授業研究会の進行・改善・・・・ 7
　（３）ＰＤＣＡサイクルに沿った課題克服の徹底・・・・・・・・・・・・ 8
　２　家庭・補充学習研究部会の取組（視点２について）・・・・・・・ ・・・ 9
　（１）誰もが自信を持って学ぶことができるための
　　　　　　　　　　　　　　　補充学習の充実と評価活動の徹底・・・・ 9
　（２）家庭と連携し，学びに向かう人間性を育てる
　　　　　　　　　　　　　　　家庭教育力向上の取組の工夫・・・・・・１０
　３　学級・集団づくり研究部会の取組（視点３について）・・・・・・・・・１１
　（１）安心して自己開示できるための生徒間の関係づくり・・・・・・・・・１１
　（２）生徒の学びを共有・発信できる学校環境の整備・・・・・・・・・・・１３
　（３）定期的な評価による実態把握・分析と活用・・・・・・・・・・・・・１４

Ⅵ　研究の成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５

参考・引用文献

おわりに

研究同人

Ⅰ　研究の概要

１　研究主題

「未来を切り拓く豊かな学びを身につける生徒の育成」

～主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくりを中心に据えて ～

２　研究主題設定の理由

（１）学校教育目標の具現化を図るために

①本校の教育目標から

＜学校教育目標＞

未来を切り拓いていく「生きる力」を持った生徒の育成

≪学校として育成を目指す資質・能力≫

①学んだことを，これまでの学びと関連付けて活用し，生活に生かしていく力（知識技能の習得）

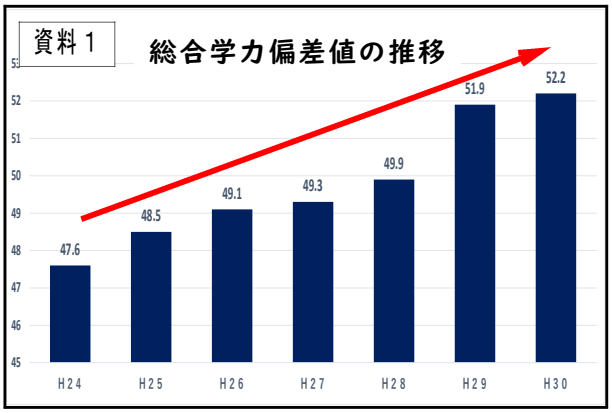
②自分の考えを伝え合い，見通しを持って課題を解決していく力（思考力・判断力・表現力の育成）

③よりよい生き方や社会のために，自ら学び，協働して活動しようとする力（学びに向かう力・人間性）

本年度の学校教育目標には「未来を切り拓いていく『生きる力』を持った生徒の育成」を掲げている。「生きる力」とは，これからの予測不可能な社会の変化に受け身で対処するのではなく，主体的に向き合って関わり合い，その過程を通して，自らの可能性を発揮し，よりよい社会と幸福な人生の創り手となっていけるようにする力である。このような生徒の豊かな未来につながる「豊かな学び」を生徒に身につけさせることが重要である。本校研究主題の具現化は，学校として育成を目指す資質・能力を育み，この学校教育目標への到達を可能にするものである。

②本校研究の流れから

本校では，平成29年度「確かな学力を育成する学習活動の工夫～主体的な学び合いを通して～」平成30年度「確かな学力を身につける生徒の育成～授業を中心とした学びの連関を通して～」という研究主題のもと「確かな学力」について研究を進め，両年度で全国標準学力検査の総合学力平均が全国標準を上回り（資料１），全国学力・学習状況調査も正答率が県平均・全国平均をともに上回る（資



料２）など，ある程度成果を上げてきた。そこで，本年度も，成果を出してきた「確かな学力」への取組を引き継ぎながら，知育・徳育・体育の調和を図っていく。また，本年度は職員の異動によって若い職員が多くなったため，１学期は授業の視点を７つに絞って「主体的・対話的で深い学び」の授業スタイルが確立するように取り組む必要があった。２学期以降は次の段階として「振り返り」についてさらに深め，個々の授業力向上の取組を行い，生徒の「豊かな学び」につながるように取り組むこととした。

資料２

教科	県平均	全国平均
国語Ａ（知識）	＋５	＋３．９
国語Ｂ（活用）	＋５	＋２．８
数学Ａ（知識）	＋３	＋１．９
数学Ｂ（活用）	＋２	＋１．１
理科	＋４	＋３．９

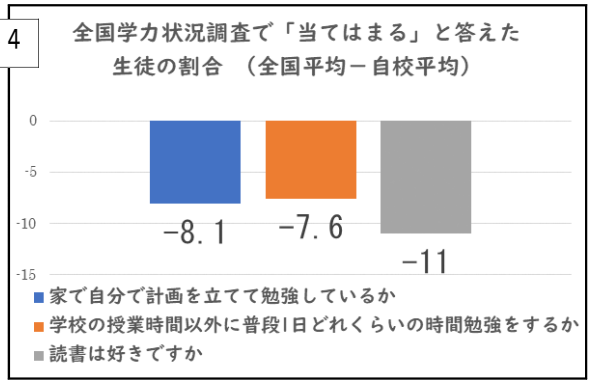
③生徒の実態から

本校の生徒は，素直で明るく，真面目に学習に取り組むが，平成３０年度県学力調査の定着率で県平均を下回った教科では「活用」に課題が多くみられることから，基礎的・基本的な知識・技能を生かして，思考・判断・表現する力が十分でない生徒が多いと言える（資料３）。

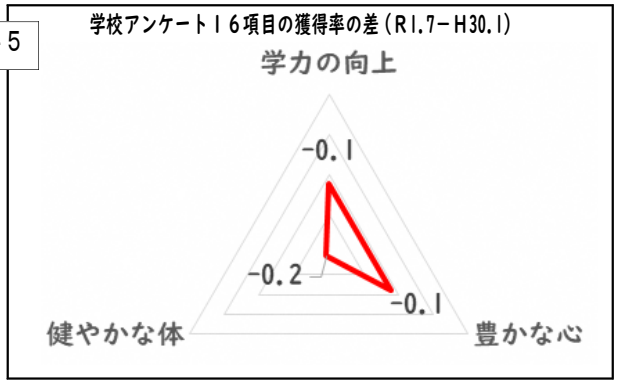
資料３

教科	国語		社会		数学		理科		英語	
学年	1年	2年	1年	2年	1年	2年	1年	2年	1年	2年
主に「知識」	5.8	4.1	-4.3	8.9	3.8	3.8	6.3	9.3	-0.7	-4.8
主に「活用」	15.7	21.7	-6.3	9.0	-6.7	2.7	6.5	9.1	-3.9	-2.2

資料４



資料５



また，家庭学習の習慣や内容も個人差があることや読書にも課題があり（資料４），さらに，知育・徳育・体育のバランスの取れた力はまだ身についていないことがわかった（資料５）。そこで，授業など教育活動全体で教科等横断的な視点に立った汎用的な力をつけさせることが必要であると考えた。

（２）社会の要請から

○各種の調査結果から見える課題

①思考力，判断力，表現力（読解力や記述式問題，知識技能を活用する問題）

②家庭での学習意欲，学習習慣・生活習慣

③自分への自信の欠如や自らの将来への不安，体力の低下

〇学習指導要領第一章総則の第１の２では，各学校において，主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して生徒に「生きる力」を育むことを目指すものとしている。そこで，全職員が，どのような資質・能力の育成を目指すのかを明確にし，主体的・対話的で深い学びの授業改善を行っていく必要があると考えた。

以上のことから本研究主題「未来を切り拓く豊かな学びを身につける生徒の育成～主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくりを中心に据えて ～」を設定した。

３　研究主題の捉え方

（１）「未来を切り拓く豊かな学び」とは

変化が激しく予測が困難なこれからの時代で，それぞれに描く幸せを実現するために一人ひとりが自分で課題を見つけ，自ら学び，自ら考え，判断して行動し，その未来を切り拓いていくことが必要である。そのために必要な子どもたちの未来につながる学びを豊かな学びと捉える。

（２）「主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくり」とは

「主体的・対話的で深い学び」の実現とは，人間の生涯にわたって続く「学び」という営みの本質を捉えながら，教師が「教える」ことにしっかりと関わり，子どもたちに求められる資質・能力を育むために必要な学びの在り方を絶え間なく考え，授業の工夫・改善を重ねていくことである。

Ⅱ　研究の方法

１　研究の仮説

仮説１　授業づくりにおいて，**単元計画や一時間の目標・学習活動・振り返りを工夫し，生徒が主体的・対話的で深い学びを実現する場面を設定すれば**，生徒がともに学び合うことへの充足感が高まり，豊かな学びを身につけることができるであろう。

仮説２　家庭学習の指導や補充学習において，**個に応じた課題設定や評価活動の徹底等を行えば**，生徒の学習に対する達成感が高まり，主体的に学習に取り組む習慣を身につけることができるであろう。

仮説３　学校生活において，**よりよい人間関係づくりの取組や互いの学びや努力を認めることのできる環境作りを行えば**，生徒が互いの存在や価値を認め合う態度が高まり，安心して学校生活を送ることができるであろう。

２　研究の視点

「未来を切り拓く豊かな学び」を身につけた生徒を育成するため，下記の視点から研究を推進する。

視点１授業力の向上…「授業づくりのチェックポイント」による「主体的・対話的で深い学びの授業スタイル」の共通実践，ＰＤＣＡ検証改善サイクルに沿った課題克服の徹底

「教師は授業で勝負する」と言われるように，「教育のプロ」として教師の授業力を高めていくことが最重要課題である。全職員の共通認識のもと，矢部中学校における「主体的・対話的で深い学びの授業スタイル」のための共通実践事項を実践し，「授業づくりチェックポイント」を意識した「導入」「展開」「まとめ」を行っていく。また，ＰＤＣＡ検証改善サイクル（以下，ＰＤＣＡサイクル）を活用し，取組を振り返りながら課題克服のための手立てを行う。

視点２発展的学習・補充的学習・家庭学習の補完…補充学習の充実と評価活動の徹底，家庭と連携し，学びに向かう人間性を育てる家庭教育力向上の取組

１時間の授業の中で，目標達成や基礎的・基本的事項の定着が厳しい生徒，発展的課題を望む生徒など，個々の能力に応じてきめ細かい対応が難しいことがある。そこで発展的な学習や補充的な学習，家庭学習によって生徒の学びの補完を行う。

視点３学習集団の形成…生徒間の人間関係づくり，学校環境の整備，定期的な評価による実態把握・分析と活用

子どもたちが学び合うためには，安心して関わりあえることが必須である。集会活動・学校行事・SGE・学習訓練等で環境的にも内面的にも好ましい学習集団へと充実するような取組を行う。また，学校アンケート・校内研究アンケート（以下，校内アンケート）・全国学力調査質問紙・hyper-QUアンケート等で定期的に実態を把握し，PDCAサイクルに反映させ，学習集団として質的な向上を図り実践が目指す集団作りにつながっているか検討・改善を行う。

３　研究組織

研究推進委員会

校長
教頭
教務主任
人権教育主任
研究主任
３部会長

研究部会（３部会）（◎は部会長）

授業づくり研究部会

◎坂田，志賀，萩峯，濱田，辻

家庭・補充学習研究部会

◎上村，橋本，上田，藤原，近藤，工藤
八田，矢島

学級・集団づくり研究部会

◎山村，安枝，後藤，猿渡，林田，原田

授業実践グループ

A グループ
（英・数・家・技）

B グループ
（理・社・かがやく１・養護）

C グループ
（国・美・音・体・かがやく２・栄養）

※全員１回以上，研究授業を行う。

４　研究の構想

矢部中学校　教育目標
未来を切り拓いていく「生きる力」を持った生徒の育成

学んだことを，これまでの学びと関連付けて活用し，生活に生かしていく力

自分の考えを伝え合い，見通しを持って課題を解決していく力

よりよい生き方や社会のために，自ら学び，協働して活動しようとする力

学校として育成を目指す資質･能力

豊かな学び

研究主題
未来を切り拓く豊かな学びを身につける生徒の育成
~主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくりを中心に据えて~

〈授業づくり研究部〉（仮説１）
- **主体的・対話的な深い学びの授業スタイルに沿った共通実践**
- **全ての教師の指導力向上につながる授業研究会**
- **検証サイクルに沿った課題克服の徹底**

〈家庭・補充学習研究部〉（仮説２）
- **誰もが自信を持って学ぶことができるための補充学習の充実と評価活動の徹底**
- **家庭と連携し、学びに向かう人間性を育てる家庭教育力向上の取組**

〈集団・学級づくり研究部〉（仮説３）
- **安心して自己開示できるための生徒間の人間関係づくり**
- **生徒の学びを共有・発信できる学校環境の整備**
- **定期的な評価による実態把握・分析と活用**

矢部中学校　生徒の実態
○全国学力・学習状況調査　○全国標準学力検査（NRT）　○県学力調査
○hyper-QU　○校内研究アンケート　○学校アンケート

Ⅲ　研究の実際

1　授業づくり研究部会の取組（視点１について）

（1）主体的・対話的で深い学びの授業スタイルの提案

①安心して発言できるルールを確立させる取組

資料６　矢部中「発表の5ステップ」

ステップ５	・友だちの発表と重ねて、考えたことを発表しよう。
ステップ４	・知っていることや自分の経験と重ねて話そう。
ステップ３	・主張（賛成や反対など）・根拠（証拠となるもの）・理由（自分の考え）を入れて話そう。
ステップ２	・理由をつけて発表しよう。
ステップ１	・顔を上げて聞く人を見て、聞きやすい音量で話そう。

主体的・対話的で深い学びを実施するためにはまずお互いに安心して発言を認め合い，伝え合う環境が大切だと考え，既存の「矢部中『発表の５ステップ』」（資料６）と「矢部中生『学びの姿勢新５か条』」を活用し発表のルールにそった学習訓練をすることにした。職員，生徒に意識させるため，校内アンケートを実施し，ルールを守れているか確認を行った。７月のアンケートでは，「授業において根拠や理由をつけて発表させて（して）いるか」の項目に課題が見られた。そこで，大研や小研で呼びかけを行い，大研では，ワークシートに「理由」を書く欄を設け「根拠や理由」を発表させることを意識した授業を提案し，具体例を示した。

②「主体的・対話的で深い学び」が実現する学習指導案の型づくり

資料７　第３学年２組　社会科学習指導案

日　時　令和元年１１月２７日（水）第５校時
場　所　３年２組教室
指導者　教諭　志賀　寛

１　単元
「価格の働きと金融」（東京書籍ｐ１３６～１４５）

２　本時の目標
○　市場経済の基本的な考え方について，身近で具体的な事例を通して理解する。【 知識理解 】

本時の手立て		
何を学ばせるか（「学習指導要領」の指導事項より）	経済活動の意義について消費生活を中心に理解できるようにするとともに，価格の決まり方や資源の配分についての理解を基に市場経済の基本的な考え方について理解できるようにする。	
基礎的・基本的事項（押さえるべき用語）	市場　市場経済　供給量　需要量　市場価格	
中心となる活動の指導の工夫	①Aへの手立て	入荷量の違いがうまれる理由やきゅうり農家の工夫について考えさせる。
	②Bへの手立て	入荷量が多い時の価格，入荷量が少ない時の価格に目を向けさせる。
	③Cへの手立て	入荷量や価格を読み取らせ，入荷量が多い時の価格及び入荷量が少ない時の価格に目を向けさせる。

３　単元計画と本時の見どころ（重点を置く視点についてどんな工夫をしていくのか）

主体的	視点１	ＩＣＴを使い，同じ果物でも価格が違うことを知ることで，価格がどのようにして決まるのか学ぼうとする意欲を高める。	
対話的	視点４	グラフをもとに，きゅうりの値段が変わる理由を文章で表現する。	☆
深い学び	視点７	キーワード「需要」と「供給」を使って，価格が決まる仕組みを各自が文章でまとめる。	

４　主体的・対話的で深い学びづくりのチェックポイント

主体的	視点１	具体物の提示やICTを活用することで，見通しを持ち関心意欲を喚起させている。
	視点２	1時間の授業で何を学んだか，何を身に付けたかを振り返らせることができている。
対話的	視点３	自分と友達の意見を比較して，自分の考えとの共通点や相違点を見つけさせることができている。
	視点４	自分の考えを文章・話・動作など様々な手段で表現させている。
	視点５	ねらいに沿って，意見を深めたり，選択したり，一つにまとめたりさせることができている。
深い学び	視点６	自分と仲間の意見を比較させ，自分の考えを再構築させることができている。
	視点７	学習内容の要点を自分の言葉でまとめさせている。

「主体的・対話的で深い学び」を具現化するため，取組が見える指導案（成案・略案《資料７》）を開発した。指導事項の明確化のために「本時の手立て」として，「何を学ばせるか（学習指導要領の指導事項より）」「基礎・基本的事項（押さえるべき用語）」「中心となる活動の指導工夫」を明記するようにした。さらに「単元計画と本時の見どころ」「主体的･対話的で深い学びづくりのチェックポイント」の欄を設け，単元を貫く課題を意識した 授業研究を行った。

本校で授業研究を行う際は，必ずこの指導案を作成して授業の構成を組み立てていった。

（２）全ての教師の指導力向上につながる授業研究会の進行・改善

①全員研究授業の取組

資料８

資料９

全員で研究を進めるために年度当初，大研・小研の計画を立てた。また，研究主任による全員研修を行い，初回に，本年度の研究テーマについての説明を行った。６月の大研では，事前研究会時にスクールサポート事業を活用し，県立教育センターの田上貴昭指導主事に「主体的・対話的で深い学び」について理論研修をしていただき，大研指導案への具体的なアドバイスをいただいた（資料８）。また，大研で同センターの浅井重光室長に，授業と協議の様子を見ていただきアドバイスをいただいた（資料９）。これらの研修を通じて職員全員で本校テーマの取組を具体的に確認し，研究をスタートさせることができた。さらに，研究途中である１０月に上益城教育事務所の中山幸博指導主事に来校いただき，「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」や「校内研究の考え方」について講話をいただいた。

授業を参観する際には，「参観シート（大研用）」を活用し視点を絞って見るようにした。授業参観後の協議では，３グループに別れ，「本時の見どころ」を中心に話合いを行った。参観時には，抽出生徒を割り振り，それぞれの生徒の発言，表情，ワークシート，つぶやきを見るようにした。

また，大研後には，協議会での話を受けた授業者が再び指導案を改訂し，その指導案を全職員で共有することで授業者以外の職員もその後，主体的・対話的で深い学びに向かう授業づくりに生かせるようにした。

資料10

（ 英語 ）科の示範授業参観後の記録
授業日（ 10 ）月（ 8 ）日（ 5 ）校時
授業者 （ ㊐ ）年 （ ㊐ ）教諭

本時の指導内容	PROGRAM 6 -② 由紀のスピーチを理解し、音読することができる。
よかった点 参考になった点	・本時の流れが示されてあった ・声がよくでていた 単語定着のための練習（ミニテスト）はよかった!! ②安心して発言できる雰囲気があった!! ・重要なキーセンテンスを板書しておくとよかった。←重要カードの活用 ストーリーだ…？板書のレイアウトを…
気になった点 改善すべき点 （継続的支援）	・単語の復習のとき ひとりひとりにあててみるのはどうか。言えたらすわる とか ひとりひとりにもっとプレッシャーを! ＊単語テストのまちがえたところ、次回のところを自学にしてきてください と指示を ・質問して無が答えているところがある。もう少し待ってあげてもよいのでは？ ＊本文をスクリーンにうつしたり、重要な英文を目に見えるようにしてみてはどうか？ ・発表の5ステップの掲示物がスクリーンで見えている。
まとめ・振り返りで参考になった点	2 Which is easier for Yuki to play with a kendama or yo-yo ? 答えは ② yo-yo is. これが めあてだった人がいた。 ＊本文に出てきた比較級の文を使って自分なりの例文をつくってみてはどうか？ 例. 1年生にとって野球をするよりバスケをするほうが簡単だ。 まこにとってけんだまをするよりヨーヨーのほうが簡単だ。 これが めあてだった
生徒の様子	・少人数なので ゆっくりした雰囲気で安心感がある → 発表しやすい雰囲気あった ・ペア活動も一生けん命とりくめている。
授業を参観しての感想	・クラスの生徒が安心して授業にとりくめている様子がわかってとても感謝してます。 ・校内研は主体的・対話的・深い学びなので、基礎の定着だけでなく、今日の場合 日本の文化（着のみきび）についても英文で紹介してみてはどうでしょうか。

・まとめと振り返りはされていたか （ ○ ・ △ ・ × ）
・カードの活用はされていたか （ ○ ・ △ ・ × ）
重要のカードを使うとよいかも。
・発表の５ステップを心がけていたか （ ○ ・ △ ・ × ）
・校内研修に沿った授業になっていたか （ ○ ・ △ ・ × ）
もう少し

②授業力向上旬間の取組

研究授業以外でも互いに参観する期間を設けた。参観する側もされる側にも学びがあるように「参観シート（旬間用）」（資料１０）を作成し，参観を行った。授業者は，普段の

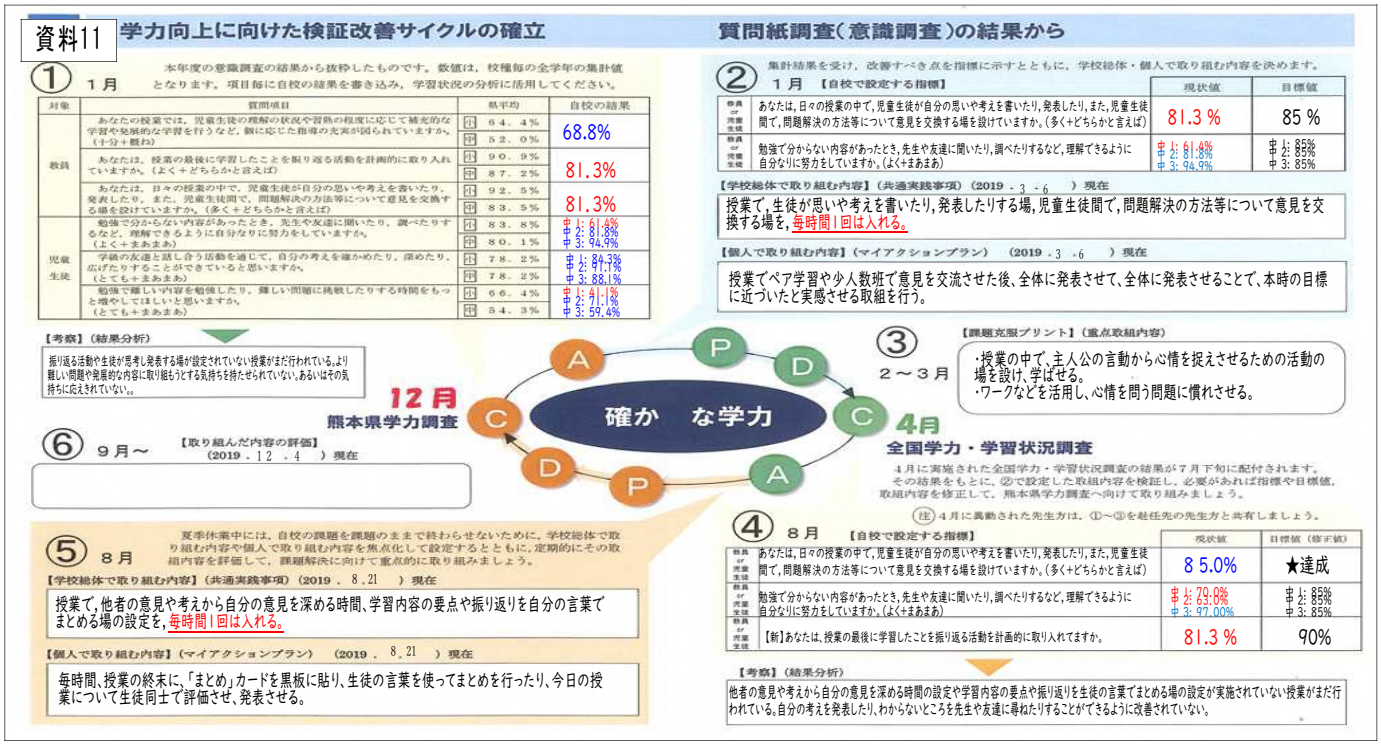
授業の悩みや相談などを気軽に行うことができ，参観者は授業づくりのヒントをもらうこともあり，率直な意見交換が行われた。

（３）ＰＤＣＡサイクルに沿った課題克服の徹底

①県学力調査の分析と共通実践

本校のＰＤＣＡサイクルに則り，課題の分析を県学力調査リーフレット（資料１１）を活用して行った。県学力調査での本校の授業の課題は「振り返り」だったので，「授業で他者の意見や考えから自分の意見を深める時間，学習内容の要点や振り返りを自分の言葉でまとめる場の設定」を学校総体で取り組む内容として共通実践した。さらに各教科で分析し，課題を洗い出し，どのような取組をするのかを明確化した。この分析を学校全体と全教科・全職員が各自の取組事項を示したシートを作成し，授業改善に生かすようにした。

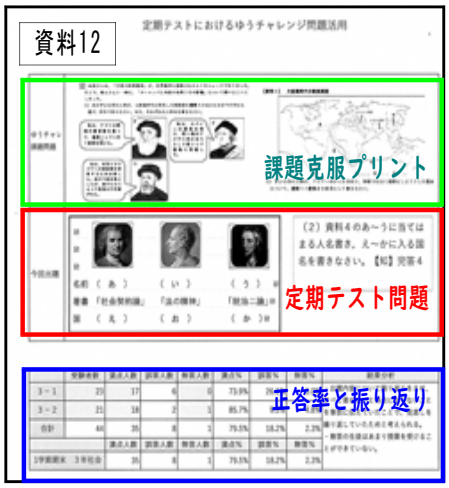
資料11



②「全国学力・学習状況調査」「県学力調査」の活用

「全国学力・学習状況調査」「県学力調査」の活用として，定期テストにおいて必ず学期に１回は過去の問題・課題克服プリント・類似問題を取り入れることとした。また，出題した問題とその正答率を出し，自分自身の授業を振り返ることとした（資料１２）。定期テストで活用した教科は研究部の掲示板に記入することで確かめ，確実な実践につなげることができた。

資料12



２　家庭・補充学習研究部会の取組（視点２について）

（１）誰もが自信を持って学ぶことができるための補充学習の充実と評価活動の徹底

①学力アップ週間

基礎学力向上を図るため，定期テスト２週間前から「学力アップ週間」を設定した。

【目的】

・基礎学力の定着を図り，学力向上を目指す。

・基礎学力の定着が厳しい生徒に対して補充的な学習を行う。

・自主学習ノートの内容の充実化を図る。

学年によって実態が異なるため，下に示す共通実践事項を理解した上で，実施方法や内容は各学年と教科担当で検討し実施した。

学力アップ週間・共通実践事項	
家庭学習	生徒は，自主学習ノートは２ページ行い，１ページ分は学力アップ週間の練習を行う。
朝自習	学年部で，学力アップテストを行い，担任が合格者数を確認する。
給食の時間	放送委員が前日の学力アップテストの各クラスの平均点と満点者数を発表する。
昼休み	学年部が目標点数に達しなかった生徒を中心に，補充学習を行う。
放課後	担当者がテストの結果を入力し，各クラスの平均点と満点者数を掲示する。
定期テスト	教科担当が学力アップテストの内容を定期テストに１問以上反映させる。出題した部分の平均点と達成率の記録を行い，教科と学年部で分析する。

②「夏季学習会」

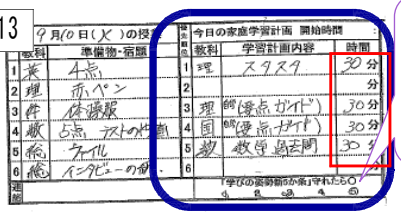
夏休み前半に３日間，後半に３日間全員参加の夏季学習会を下記の要領で開催した。基本的な学習内容について補充学習を行うことで，基礎的な学力の定着を図ることを目的とした。

１・２年生	１コマ３０分で行う。 基礎的なドリル学習を行い，後半は確認テストを行い，補充学習対象者を絞り込む。 ３コマ目を対象者のみの補充学習の時間とする。 後半日程の初日は，宿題点検日とする。
３年生	１コマ５０分で行う。 共通テスト対策講座を行い，個別に補充学習を行う。

（２）家庭と連携し，学びに向かう人間性を育てる家庭教育力向上の取組の工夫

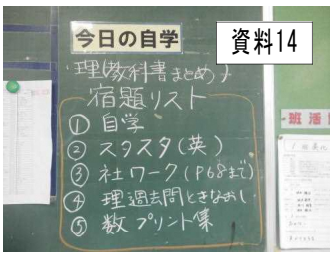
①家庭学習へ誘う矢部中プランニングタイム

資料13



合計時間が
１年８０分
２年１００分
３年１２０分
をこえるようにする。

「家で自分で計画を立てて勉強している」（全国学力・学習状況調査）と回答した生徒は6.8％（全国平均比－8.1％）と落ち込みがあった。実態を改善するために「矢部中プランニングタイム」を実施した。「矢部中プランニングタイム」とは，帰りの会の５分間に，翌日の時間割等を記入するシート（資料１３）に家庭学習の計画を立てる時間である。早く計画を立て終わった生徒は，自主学習ノートを進める時間とし，その続きを家庭で学習するという橋渡しの時間と位置づけた。また，その日のうちにしなければならない宿題リストを時間割黒板の一部に明記し（資料１４），生徒がどの宿題から優先して行うのか考えやすくする取組を行った。



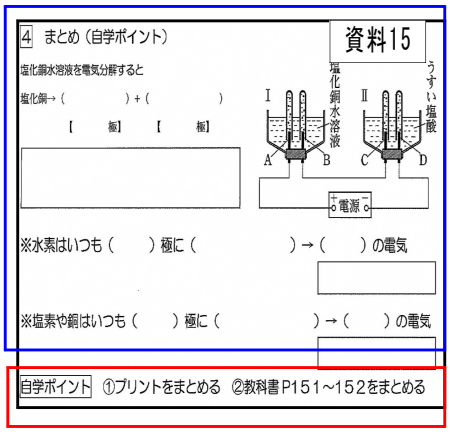
運営を生徒会の学習委員会に行わせ，「矢部中プランニングタイム」の提案や下記の委員会で考えた質問項目での事前アンケートと事後アンケートの実施・分析し，その結果を全校生徒で共有し「矢部中プランニングタイム」の検証を生徒主体でも行った。

①家庭学習を計画（何をするのか，何からするのか，何分するのか）を立てて行っている。
②自主学習をすることで，授業の内容が分かったと実感する時がある。
③自主学習ノートの活用の仕方をもっと知りたいと思う。
④自主学習の教科がかたよってないか。
⑤質のよい自主学習ができているか。
⑥家庭学習時間の基準（１年生：８０分，２年生：１００分，３年生：１２０分）を毎日超えて勉強しているか。

②家庭学習の内容を向上させる取組

ア　教科担任による家庭学習指導

家庭学習を行うときに，学習の仕方がわからない生徒が多くいた。そこで「家庭学習の手引き」を提示した。また，授業においてもワークシートに「自学ポイント」を示し，自主学習の方法を紹介する取組を行った（資料１５）。



イ　自主学習ノートの紹介

学習の仕方や工夫がすばらしい生徒の自主学習ノート（以下，自学ノート）を学習委員が評価し掲示したり，教師が評価し通信で紹介を行ったりして，啓発を行った。

③教育の日の提案…ノーメディアデーと道徳の読み物教材との連携

今年度から「矢部中学校きょういく（１９）の日　ノーテレビ・ノーメディアデー」と併せて，道徳の読み物教材を家族で一緒に読む取組を実施した。メディアコントロール力を身につけ，家庭学習への関心を高めると同時に，地域教材を一緒に読むことで，家族とふれあう時間をつくることを目的とした。家庭の状況を考慮し，３つのコースの中から１つ選択し，実践してもらうこととした（資料１６）。

資料16

令和年１１月１６日
矢部中学校研究部

保護者　様

矢部中学校「きょういく（１９）の日」
ノーテレビ・ノーメディアデーのお願い

１１月も半ばになりました。皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。
今週、２学期の期末テストを実施しました。学校では「学力アップ週間」を設定し、朝自習ではテストを行い、昼休みには補充学習を行うなど、定着を図るために努めました。また、子どもたちも、一生懸命勉強に取り組んできました。
さて、今月も下記の通り「ノーテレビ・ノーメディアデー」の実施を行います。目的をご理解いただき、ご協力をしていただきますよう、よろしくお願い致します。

記

１　目的
　テレビやメディアを見ない日を設定することで、日頃の時間の使い方を見直し、生活のリズムを整えるとともに、家族との会話やふれあいの時間を増やす。

２　実施日
　１１月１９日（火）

３　実施方法
　３つのコースの中から、家族で目標を１つ設定し、実践する。その後、感想を学校に提出する。

キ　リ　ト　リ

生徒氏名（　）年（　）組（　　）

実施日	１９日または（　　）日	
コース（A~C いずれかに○を）	A	家族全員で１時間しか見ない。
	B	家族全員で全く見ない。
	C	家族全員で全く見ず、（　　）をする。
結　果	達成できた　・　達成できなかった	
生徒の感想		
保護者の感想		

私たちの地域の宝である通潤橋に置きかえて考えてみるとやはり心が痛みます。〈略〉その為にも地域の皆で見守っていきたいです。

「熊本スピリッツ」もそうですが，自分たちの住んでいる「山都町スピリッツ」に置き換え考えてみるいい機会でした。

実施後は，達成状況，生徒や保護者に感想を記入してもらい，学級通信やPTA新聞の記事にすることで，各家庭に周知した。

道徳の読み物教材との連携は年２回実施し，９月は道徳の地域教材「熊本の心」の「熊本スピリッツ」，１１月は熊本地震関連教材「つなぐ～熊本の明日へ～」の「よみがえれ！阿蘇神社」を活用した。

④教育講演会

１学期のPTA授業参観において，モバイル・ネットワーク研究所の松川由美さんを講師に招き「スマホやゲームとうまくつきあうために」という題目で講演を行っていただいた。生徒と保護者と一緒に考えることで，メディアコントロールの意識の向上を図った。（資料１７）

資料17

今まで携帯を使っていて危ないことが起こる危険性をあまり気にしていませんでした。何かあってからでは遅いので，自分で決めたルールをこれからの生活で守っていきたいです。

３　学級・集団づくり研究部会の取組（視点３について）

（１）安心して自己開示できるための生徒間の関係づくり

①矢部中生「学びの姿勢・新５か条」の活用

自他を認め合う支持的風土を集団の中に根付かせるためには，日頃の学習活動の中で実践を重ねていくことが大切である。学習規律の基盤として大切にしているのが「学びの姿勢･新５か条」（資料１８）である。生徒会活動で行う「着席コンクール」「３秒礼コンクール」「家庭学習時間調べ」等を全校で共通実践することで，集団への所属感

資料18

矢部中生「学びの姿勢 新５か条」

1 学習用具の準備をして、１分前に着席します。
2 授業のはじめとおわりに３秒礼と大きな声であいさつをします。
3 顔を上げて先生の話や友だちの発表に集中します。
4 積極的に発表や質問をします。(一日一挙手)
5 家庭学習で宿題(予習･復習)を毎日します。

※家庭学習のめやすは、
１年生 ８０分 ２年生 １００分 ３年生 １２０分

や達成感を味わわせられるようにした。

②集会活動において

生徒集会では，生徒会執行部を中心に生徒主体でより良い学校づくりに向けた取組を行い，自己開示と受容・共感を進めていった。一例として，生徒が企画・実施した「ハートフル集会」（資料１９）では，「相手の気持ちを考えて発言・行動をする」「友達のよいところを見つけて伝えよう」「挨拶を明るく元気な声でしよう」という３つの共通実践事項やいじめの件数，解消率等を報告し，いじめは身近な問題であることを呼びかけ，自分の事として捉えさせ，一人ひとりの問題意識を高められるようにした。また，各学期の人権学習後は，学年集会を必ず行い（資料２０），自分の思いを代表者が発表したり，それに対し，自分の考えや思いを返したりする取組を行った。

③学校行事において

学校生活において，よりよい人間関係づくりの取組や互いの学びや努力を認めることのできる環境作りに，学校行事は良い機会のひとつである。体育大会や文化祭という大きな行事を通して，学級・学年，そして学年を超えての生徒同士の認め合いやつながりを意識して，「メッセージカード」を活用した（資料２１）。行事が終わるとすぐに，学級のみんなへ，学年のみんなへ，先輩へ，後輩へと行事を通して感じたことや見習いたいところ，すばらしかったところなどを書き，代表が学級を訪問し，言葉を添えて渡した。また，学級通信で紹介したり，全校生徒が見ることができるように廊下等に掲示したりした。

④hyper-QUアンケートからの取組

ア　データ分析の研修

昨年度の反省を踏まえ，本年度も「第１回目hyper-QUアンケートの実施→分析→具体的な取組の内容検討→各学級・学年で実施→第２回hyper-QUアンケート」と丁寧に

取り組んだ。夏季休業中の研修時に講師を招聘し，講義と演習を受けた。その後，学年毎にデータを分析し，それぞれの学級の状況を向上させていくために，どのようなSGEのエクササイズや教育相談等を行っていくか検討した。

イ　hyper-QUアンケートを活用した学級・学年活動

昨年度から引き継いだSGEを綴ったファイルをもとに，新年度スタートからスムーズにSGEを実践することができた。本年度は，学級単位だけでなく，学年単位でもSGEに取り組んだ。学級では，帰りの会の時間を有効活用し，ショートエクササイズを取り入れた。また学校行事の後に，互いのいいところを見つけ紹介する取組を行った（資料２２）。生徒会リーダー研修会でもSGEを活用し，新リーダーたちが活発に意見を述べたり，相互を認め合ったりする研修を行った（資料２３）。

ウ　個人への関わり

hyper-QUアンケートの結果をもとに，学校生活に満足しておらず，侵害を受けていると感じている生徒や承認されていると感じることができていない生徒への丁寧な対応を心がけ，毎月「見つめカード」（資料２４）を実施した。「見つめカード」は，生徒が学校生活をどのように過ごしているのか２択で答えることができるアンケートであり，毎月末に実施した。それをもとに生徒への個別の声掛けや教育相談を行い，特に回答や様子が気になる生徒については，学年だけでなく生徒指導委員会でも協議し，学校全体で情報を共有するようにし，対策を考え対応した。

（２）生徒の学びを共有・発信できる学校環境の整備

①掲示板の活用

校内にある掲示板や掲示箇所について，担当者や生徒会委員会担当等の割り振りの見直しを行った。生徒の動線にしたがって，より効果的な掲示のあり方を検討し，学校全体の動きや生徒会の活動，学年の学びが見える掲示に取り組んだ。メインとなる掲示板（資料２５）には，校内研究

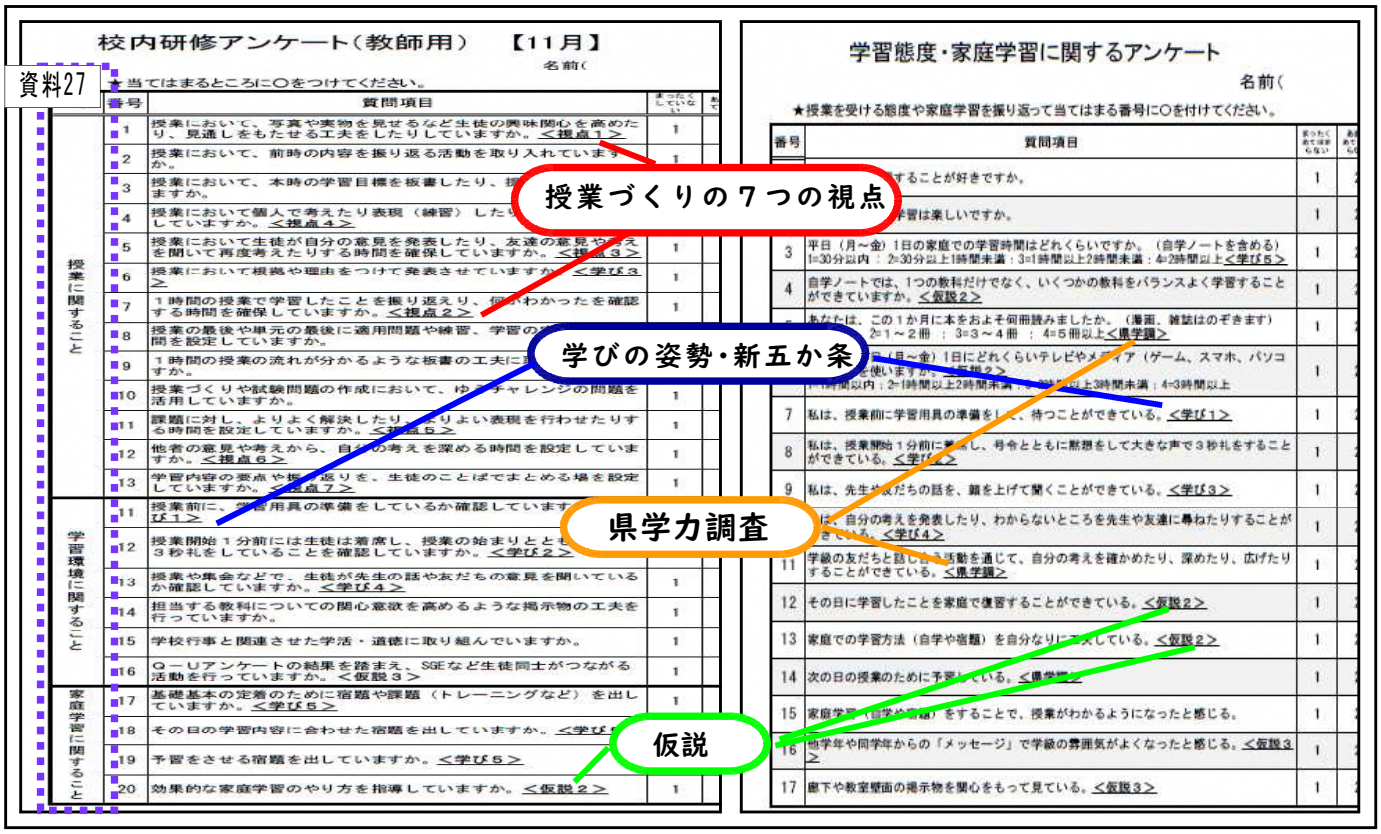
３つの研究部会が目指す，授業への取組・学習意欲の向上・豊かな人間関係についての掲示を行った。また，生徒会活動で取り組んでいる「ありがとうカード」（資料２６）や「ハートフルメッセージ」等は給食時の放送で紹介するなどの掲示以外の活動に広がりが見られた。

②スライドショーの活用

職員玄関には，パソコンを利用したスライドショーで授業や校内の活動の様子，学年行事，部活動等の様子を披露している。他学年の活動や実際には見ることができなかった友だちの姿，また，それぞれの活動の自分の姿を振り返ることができる場となっている。

（３）定期的な評価による実態把握・分析と活用

教科授業以外での生徒同士の人間関係，生徒と教師の信頼関係を形成する実践活動に取り組んできたが，その実践が目指す集団作りにつながっているかを検討･改善していくことが必要である。そのために校内アンケート（資料２７）を７月と１１月の２回行った。教師用アンケートは，「授業に関すること」「学習環境に関すること」「家庭学習に関すること」の内容からなり，本校で設定している「授業づくりの７つの視点」(アンケート項目1，4，7，11，12，13参照)，「学びの姿勢･新５か条」(アンケート項目6，14，15，16，20，21，22参照)，「仮説2，3」(アンケート項目19，23参照)から作成した。生徒用



アンケートは，学習態度･家庭学習の内容からなり，「学びの姿勢･新５か条」(アンケート項目3，7，8，9，10参照)，「仮説2，3」(アンケート項目4，6，12，13，16，17参照)，「県学調アンケート」（アンケート項目5，11，14参照)から作成した。また，それぞれのアンケート質問項目に共通する内容を入れることで，教師と生徒の実態状況を把握するだけでなく，教師の取組状況と生徒の学習状況に相関関係があるかどうかを分析することができるようにした。

Ⅳ　研究の成果と課題

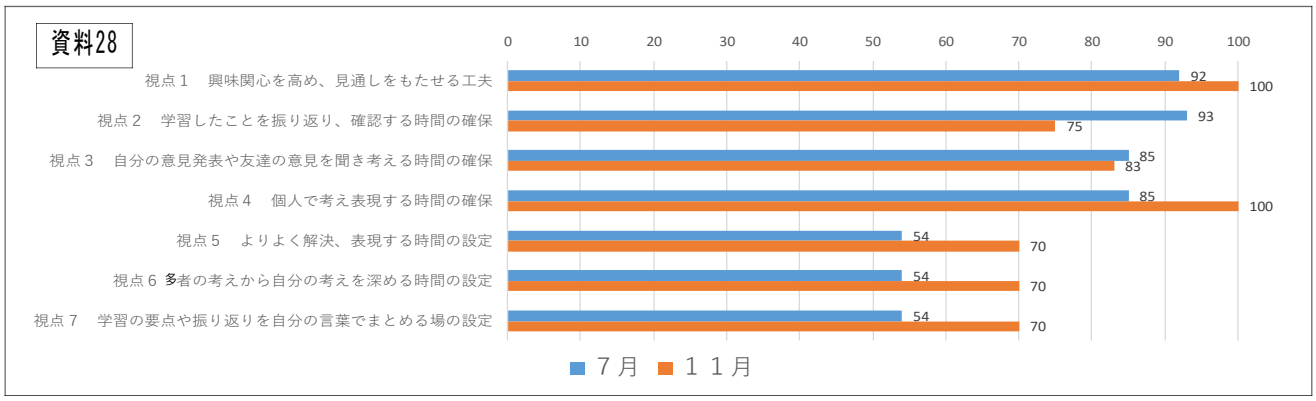
１　研究の成果

（１）仮説１について

> 授業づくりにおいて，単元計画や一時間の目標・学習活動・振り返りを工夫し，生徒が主体的・対話的で深い学びを実現する場面を設定すれば，生徒がともに学び合うことへの充足感が高まり，豊かな学びを身につけることができるであろう。

仮設１では，視点１に基づき，授業力の向上及びＰＤＣＡサイクルに沿った課題克服の徹底に重点を置いて研究実践に取り組んだ。

①授業力の向上



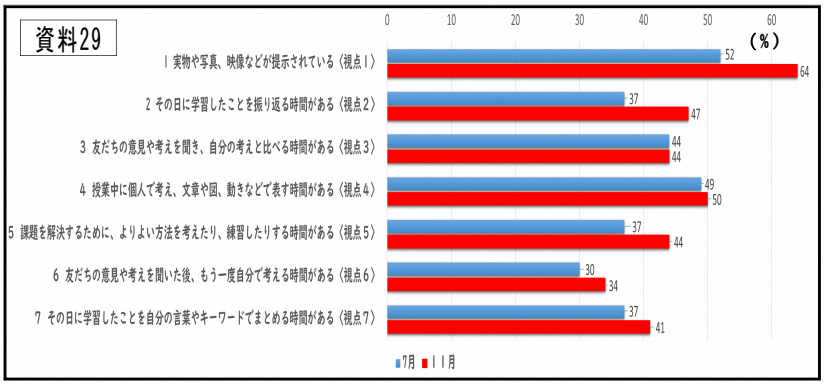
資料２８は，７つの視点に関する校内アンケート（教師）の上位回答の割合の推移である（以下，校内アンケートの数値は，上位回答の全体に占める割合を表す)。

実施時期や単元によって影響を受けるが，視点２，視点３をのぞき得点が上昇している。３回の講師招聘により，研究の土台となる理論を学び，小・大研で視点を明確にした指導案を作成して全員が授業を行ったことで，各教科においての研究テーマを具現化することができた。

また，県学力調査の質問紙「自分の考えを確かめたり，深めたり，広げたりすることができている」では，県平均を１・８ポイント上回ることができた。

生徒アンケートでは全視点で数値が上昇し，研究実践が生徒の実感に至っていると考えられる（資料２９）。実際の授業でも，意見交換の深まり，日常生活や他教科に生かす生徒も増えてきている。

資料29



②ＰＤＣＡサイクルに沿った課題克服の徹底

Ⅲ研究内容１（３）で示した自校の指標に関して，校内アンケートの視点６「他者の意見や考えから，自分の考えを深める」，視点７「学習内容の要点や振り返りを生徒のことばでまとめる場を設定している」では，教師，生徒とも向上した。また，「授業づくりや試験問題作成でゆうチャレンジの問題を活用している」が５４％から７０％に上昇しており，ＰＤＣＡサイクルに沿って課題克服の手立てを講じ，推進したことにより対話等を通して学びを広げ，深めることができたと考える。

また，校内アンケートにおいて「矢部中での学習は楽しい」と回答した生徒は８６％となり，仮説１に示した内容はおおむね達成することができたと考える。

（２）仮説２について

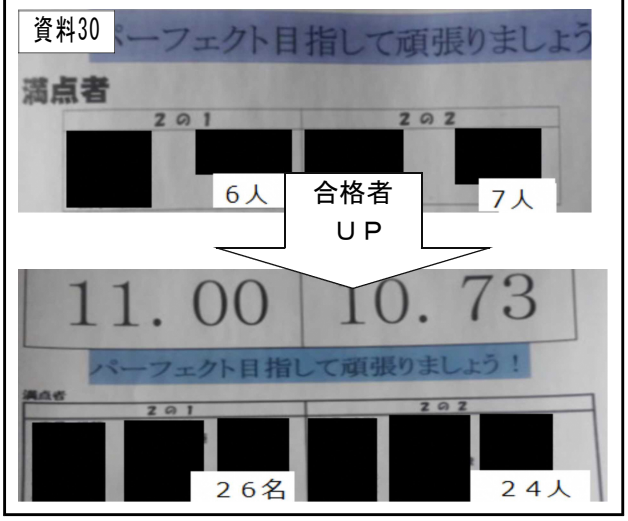
> 授家庭学習の指導や補充学習において，個に応じた課題設定や評価活動の徹底等を行えば，生徒の学習に対する達成感が高まり，主体的に学習に取り組む習慣を身につけることができるであろう。

仮説２では，視点２に基づき，発展・補充学習の充実と評価活動の徹底，家庭教育力の向上に重点を置いて研究実践に取り組んだ。

①補充学習の充実と評価活動の徹底

学力アップ週間では，クラスの平均点や満点者数をクラスマッチ形式で発表し，満点者名や連続満点者名を掲示することで，満点をめざそうとするなど前向きに学習する雰囲気が醸成された（資料３０）。

資料30



補充学習では対象者を絞り，個のニーズに応じた学習指導を行うことができた。夏季学習会の後半日程初日に宿題点検を行い，未完成者に学習支援を行うことで，２学期のスタ

ートをスムーズに行うことができた。

さらに，下表のとおり，定期テストとのつながりを明確にしたことで，県学力調査における知識理解の結果から想定される目標達成率を，大きく上回ることができた。

このように，学習指導の定着状況を把握し，指導の改善につなげることができた。

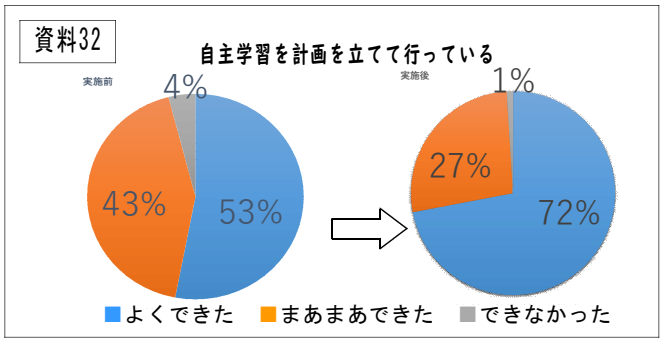
定期テスト名	学年・教科	目標達成率	生徒の達成率	差
２学期実力テスト	１年国語	49.6%	90.6%	41.0%
	２年国語	45.1%	91.3%	46.2%
２学期期末テスト	１年社会	42.0%	82.5%	40.5%
	２年国語	45.1%	80.6%	35.5%

②家庭教育力向上の取組の工夫

資料31　質問項目（校内アンケート･生徒）	上位回答の割合		
	７月	１１月	差
①平日の家庭での学習時間はどれくらいか （1:30分以内　2:1時間未満　3:2時間未満　4:2時間以上）	77%	82%	+5%
②自学ノートではいくつかのを教科をバランスよく学習している （1:していない　2:あまりしていない　3:ときどきしている　4:よくしている）	56%	67%	+9%
③その日に学習したことを過程で復習することができている （1:していない　2:あまりしていない　3:ときどきしている　4:よくしている）	60%	62%	+2%
④家庭学習をすることで授業がわかるようになったと感じる （1:していない　2:あまりしていない　3:ときどきしている　4:よくしている）	53%	60%	+7%

家庭学習の時間，自学ノートの内容で改善が見られた（資料３１）。平日の家庭学習時間２時間以上の生徒は１６％から３３％へと１７％増え，学習委員会のアンケート結果（資料３２）で，全学年で自分で計画し家庭学習をする力が伸びていることが分かる。「矢部中プランニングタイム」で家庭学習の時間の設定や内容選択（実施教科や復習内容）を考える時間が確保され，自分で計画し学習を進める力がついたと考えられる。

また，校内アンケート「家庭学習をすることで授業がわかるようになったと感じる」（生徒用）でも７％伸びが見られたことから（資料３１），家庭学習の量や質を向上させたことによって，授業への理解力が高まったと考えられる。



「矢部中学校きょういくの日」の取組や，学級通信やPTA新聞による啓発活動を通して，メディアコントロールや家庭学習，道徳をはじめ学校で学習したことに関連した話題への興味が高まり，保護者の意識の向上につながったことで，子どもたちが主体的に学習に取り組むことへの後ろ盾が強化され，生徒の家庭学習への意識も変化してきた。

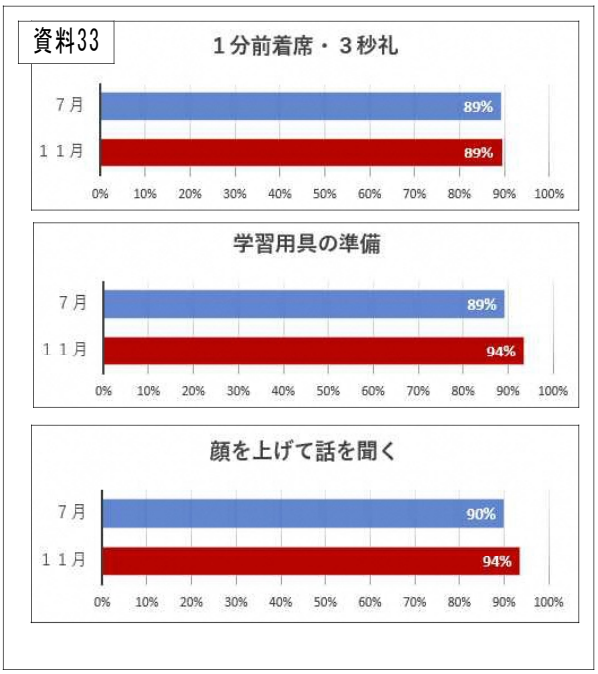
（３）仮説３について

> 授学校生活において，よりよい人間関係づくりの取組や互いの学びや努力を認めることのできる環境作りを行えば，生徒が互いの存在や価値を認め合う態度が高まり，安心して学校生活を送ることができるであろう。

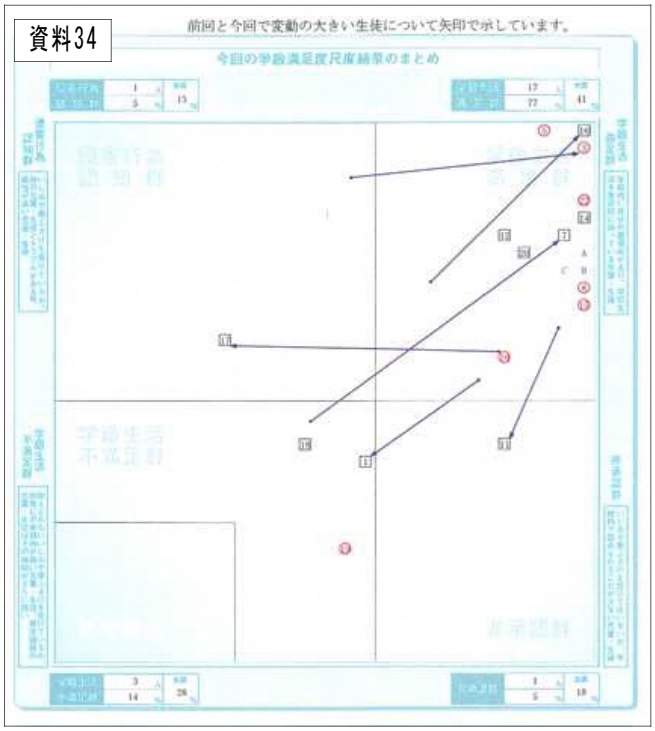
仮説３では，視点３に基づき，生徒間の関係づくり，学校環境の整備，評価の実施と活用に重点を置いて研究実践に取り組んだ。

①生徒間の関係づくり

資料３３の校内アンケート（生徒用）では，「学びの姿勢・５か条」のうち，「授業前に学習用具を準備して待つことができる」「先生や友達の話を，顔を上げて話を聞くことができる」では，上位回答割合が７月と比べて４～５％高く，９０％を超えており学習規範意識の高まりが見られる。これは，教職員と生徒とが共通に実践意識を持ち，生徒が主体的に集会や校内放送等によるメッセージの発信に取り組むことで，自他の思いを受け止めていく行動力が身についてきた表れであると考える。



また，夏季休業中にhyper-QUアンケートの結果分析やSGEの研修を行ったことで，校内アンケート（教師）の設問「hyper-QUアンケートの結果を踏まえ，SGEなど生徒同士がつながる活動を行っていますか」では，上位回答の割合が３６％から５０％と大きく伸び，２回目のhyper-QUアンケートでは，学級生活満足群へ入る生徒の増加につながっている（資料３４）。



さらに，学校アンケートでも，設問「矢部中学校でよかった」の上位回答の生徒が９１％（７月）から９４％（１２月）に増えていた。

②学校環境の整備

学校環境整備では，生徒会委員会を中心とした活動が活発になり，校内行事や委員会の取組などについて掲示物展示（資料３５）や，校内放送による広報活動を行う姿があった。生徒会交代後も，新執行部・委員長等が継承・発展させようとする動きが見られている。

③定期的な評価による実態把握・分析と活用

校内研究での共通実践事項に対する成果を数値として見ることができるよう校内アンケート（教師・生徒用）の設問を設定した。７月と１１月に実施し，実践できていることを数値として表すことにより，教師の研究に対する取組への意識を高め，教師間の情報交換や共有を増やすことで，教師自身の指導力・実践力の向上につながった。

２　研究の課題と志向

（１）仮説１について

①矢部中「発表の５ステップ」

「矢部中『発表の５ステップ』」の「ステップ４・知っていることや自分の経験と重ねて話そう」の発言を引き出すことがあまりできなかった。これは，学習したことを生徒のメタ認知や実生活の中で生かすことに通じるものである。改善するためには，職員や生徒が普段から意識することが重要になる。今後，具体策を示し実践化していく必要がある。

②授業研究会の進行・改善

全職員の研究授業を年度当初に位置づけ，「参観シート」により視点を絞って話し合うことで一定の成果を出せた。授業研究会では，授業実践グループで抽出生徒を中心に話し合い，全体でも協議することで生徒を中心に据えた授業研究を行えるようにしたい。

③ＰＤＣＡサイクルプランに沿った課題克服の徹底

本校の課題克服のためには，「学習内容の要点や振り返りを生徒の言葉でまとめる場」の設定が重要となる。校内アンケートの数値は上昇しているが十分な改善とは言えず，引き続き本校の課題及び克服目標として，「振り返り」を授業改善の最大ポイントとして重視し，授業研究を深めていきたい。

（２）仮説２について

①補充学習の充実と評価活動の徹底

夏季学習会は確認テストの難易度により補充対象者の人数に変動があり，十分な個別の学習支援ができないことがあった。また，出張や部活動などでの影響で，支援体制が困難

だった学年もあった。補充学習対象者の絞り込みに問題の難易度を合わせているため，成績中位以上の生徒のモチベーションを上げる取組を行いたい。

③家庭と連携をし，学びに向かう人間性を育てる家庭教育力向上の取組の工夫

質問項目（生徒用）	上位の割合		質問項目（教師用）	上位の割合	
	7月	11月		7月	11月
次の日の予習をしている	19%	22% ↑	予習をさせる宿題を出している	16%	25% ↑

上表のとおり「次の日の予習」の項目は，依然低い数値であり，課題選択方法やノートの書き方など，家庭学習の進め方の指導を再構築する必要がある。そのために，自学ノートで効率よく力をつける方法など，生徒と教師の評価項目を明確にする必要がある。　また，「予習をさせる宿題を出しているか」の項目では，７月，１１月とも低かった。教師の取組が生徒の家庭学習に影響していると考えられる。授業の「振り返り」と連動して課題を出すなど，今後の研究の余地がある。

（３）仮説３について

①安心して自己開示できるための生徒間の関係づくり

「自分の考えを発表したり，わからないところを先生や友達に尋ねたりすることができている」の項目では，上位回答の割合に伸びが見られなかった。自分の考えや意見を他者の前で発言することへの抵抗感は，様々な要因が考えられる。それらを探っていくためのアンケート等の実態把握の方法についての検討が必要であると考える。

②生徒の学びを共有・発信できる学校環境の整備

「主体的・対話的で深い学び」に関する実践や情報の共有・発信は，生徒会活動へも広がっており，今後も充実させていきたい。また，各種通信やホームページなど校外への発信もさらに進めていきたい。本年度から，生徒会執行部を中心として全生徒による地域ボランティア活動が始まった。これまでの地域学習等による関わりとは違った接点で，ボランティア活動を通して地域の方々との関わりを深めていきたい。

③定期的な評価による実態把握・分析と活用

hyper-QUアンケートなどの定期的な実態把握と分析はできたが，研究の検証を確実に行っていくためには校内アンケートの実施方法について課題が残る。回数や項目設定など実施方法を改善し，丁寧な分析を行わなければ，数値が伸びない原因等を探ることはできない。本年度は，再検討が十分にできていないため，研究の成果を確かめ，向上させるために実態把握の方法についてさらに検討を重ねていきたい。

参考・引用文献

１　中学校学習指導要領及び中学校学習指導要領解説総則編　文部科学省

２　義務教育特別部会における審議経過報告（案）　文部科学省

３　中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程企画特別部会　論点整理　文部科学省

４　『授業の見方「主体的・対話的で深い学び」の授業改善』澤井陽介　東洋館出版社

５　「カリキュラム・マネジメント入門―『深い学び』の授業デザイン。学びをつなぐ７つのミッション。」田村学　東洋館出版社

６　「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けて：校内研修シリーズ」田村学　NITS 独立行政法人教職員支援機構

おわりに

「教育は人なり」教育は人間によって行われる。どんなに時代が変わり技術が発達しても，子どもを豊かに育て能力を引き出すことができるのは教師という人間にかかっている。我々は本年度，「『主体的・対話的な深い学び』を実現する授業改善」に目を向け，子どもたちが未来を切り拓いていくために必要な「生きる力」を育成することを目的に，本校研究テーマである「豊かな学び」を身につけさせるため，全職員で目指し研鑽してきた。

各界では，「教育は人なり」と同類の言葉が様々なところで使われている。「企業は人なり」，「商売は人なり」，「技術は人なり」･･･と。昨今，各界において人材こそ最も重要な資本である。今こそ，社会は，「人」を基盤にして成り立つ。「生徒もまた人なり」どんなに時代が変わり技術が発達して予測困難な時代が来ようとも，社会を豊かにし可能性を引き出すことができるのはこれからの社会を生きていく子どもたちなのである。我々の手法と熱意がそのような子どもたちを豊かに育て能力を引き出していたか，本論文で検証したことさらに生かし，今後も教育実践を重ね，本校の教育目標の実現に向けて邁進していきたい。

最後に，本研究の推進にあたり，ご指導・ご助言をいただいた上益城教育事務所並びに山都町教育委員会に心から感謝とお礼を申し上げたい。

山都町立矢部中学校　研究同人

今村研詞	西本仁史	藤原一也	山村和也	佐藤吉人	後藤博美	坂田友紀
志賀　寛	上村早苗	寺田亜紀	安枝　優	橋本昌明	近藤紗也香	萩峯健吾
林田佳純	原田力子	西清也	濱田佳代	猿渡正一朗	上田郁子	辻　卓也
平川亜紀子	工藤仁美	矢島智恵美	八田卓二	平川美保	吉竹香枝子	ｼﾞｮｼｭｱﾛｼﾞｬｱｿﾝ